

留学生の方言意識

—熊本方言テキスト作成のためのアンケート調査から—

熊本県立大学 文学研究科 2年 船本 日佳里

1. 序

本稿は、熊本方言テキストの作成に先駆けて、熊本市在住の留学生に対して行ったアンケート調査の結果をまとめたものである。後にアンケート結果として示すが、アンケートを行った留学生の80%以上はアルバイトをしているということが分かった。「地方における日本語教育」を考える上で、方言の扱い方を考えるのは重要であるが、特に、地方におけるアルバイトも含めた「職場」では方言がコミュニケーションツールとなることが多く、時に共通語よりも敬意が高くなることもある。

現在日本の外国人登録者数は215万人を超え、数十年後には人口の30%を占めると予測されている。そのような多文化共生社会において、留学生や日本にやってくる外国人は、もはや「語学留学」や「観光」等の“お客さん”ではない。多文化共生社会を構成する一員、“市民”として生活するのである。したがって、彼らが日本で生活を送る上で、方言を使ったり聞いたりする可能性は十分に考えられる。

このような時代的・社会的背景に基づき、今回、「地域に暮らす外国人」のために「方言」のテキストを作成するに至った。アンケートでは留学生を取り巻く言語環境や、熊本方言をどのように思っているか等の方言に対する意識について調査を行った。

2. 調査の対象と方法

2-1. 被験者

被験者数：31名

国籍：中国16名、バングラデシュ9名、韓国5名、イギリス1名

男女比：男性17名：女性14名

年齢：(10代)1名、(20～25代)25名、(26～30代)3名、(30代～)2名

所属：日本語学校22名、大学9名

2-2. 調査方法

実施日：2007年1月17日～18日

調査は、被験者の属する日本語学校、大学で行われた。調査票はa「調査協力願」、b「協力同意書」、c「質問・回答」で構成されており、aとbは中国籍の被験者には中国語、韓国語籍の被験者には韓国語、バングラデシュ、イギリス籍の被験者には英語のものを配布した。cは全て日本語で表記されているため、質問項目の日本語が分からない被験者には、方言教材開発に携わっている日本語教師が説明を加えながら調査を行なった。

3. 質問項目

表1に、アンケートの質問項目を示す。質問は25個で、「滞在期間」、「日本語学習歴」、「滞在场所」、「留学目的」、「日常使用言語」、「熊本方言についての知識と使用状況」、「アルバイト先での方言について」、「母語での方言使用状況」、「熊本方言の学習」の8つのカテゴリーから成る。

表1 質問項目

分類	番号	質問
滞在期間	1	日本に来てどれくらいですか。
日本語学習歴	2	日本語はどこでどれくらい勉強しましたか。
滞在场所	3	日本に来てから、どこに住んでいましたか。 今まで日本のどこに、どれくらい住んだことがありますか。
留学目的	4	今の学校を卒業したらどうしますか。
日常使用言語	5	あなたは今、日本人といっしょに住んでいますか。
	5-1	いっしょに住んでいる日本人は何歳ぐらいの人ですか。
	5-1-1	うちで日本語を話しますか。
	5-1-2	共通語で話しますか。熊本方言で話しますか。
熊本方言についての知識と使用状況	6	熊本方言を知っていますか。
	6-1	知っている方言を書いてください。
	6-2	まわりの日本人は、あなたと話すとき共通語を話しますか。 熊本方言を話しますか。
	6-3	あなたは熊本方言を使いますか。
	6-4	どこで使いますか。
	6-5	だれと話すとき使いますか。
アルバイト先での方言について	7	アルバイトについて聞きます。
	7-1	どんなアルバイトをしていますか。
	7-2	アルバイトでお客さんと話をしますか。
	7-3	アルバイト先で熊本方言を使いますか。
	7-4	だれと話すときに使いますか。
	7-5	それはどんな人ですか。
母語での方言使用状況	8	あなたの母語について聞きます。
	8-1	母語で方言を使いますか。
	8-2	どこの方言を使いますか。またどのくらい使いますか。
	8-3	母語で話すとき、方言と共通語を使い分けることがありますか。
	8-4	どんなとき方言を使いますか。
熊本方言の学習	9	熊本方言を勉強したいですか。どうしてですか。理由も教えてください。

4. 結果と考察

4-1. 滞在期間・滞在场所、日本語学習歴

まず、被験者についての基本情報を表 2～表 5 に示す。

表 2. 滞在期間

	人数	%
①1 ヶ月以上～6 ヶ月未満	6	19%
②6 ヶ月以上～1 年未満	8	26%
③1 年以上～1 年 6 ヶ月未満	10	32%
④1 年 6 ヶ月以上～2 年未満	0	0%
⑤2 年以上～3 年未満	3	10%
⑥3 年以上～4 年未満	3	10%
⑦4 年以上～5 年未満	1	3%

滞在期間は、③1 年以上～1 年 6 ヶ月が最も多く、次に②6 ヶ月以上～1 年未満と続く。日本語学校で学ぶ被験者は、2006 年 10 月に入学した 1 年半コースの学生と、2007 年 4 月に入学した 1 年コースの学生で、滞在期間の①、②に集中している。

大学で学ぶ被験者には、日本語学校を卒業した学生、大学 2 年生なども含まれるため、⑤、⑥の滞在期間が多い。

来日して 1 年も経っていれば、アルバイト先で「方言」を聞くこともあるだろうし、学びたいと必要性を感じている学生もいるかもしれない。しかし、来日したばかりの留学生にとっては、「方言」は存在すら知らない可能性もある。一方大学で学ぶ留学生は、アルバイト先では勿論のこと、日本人の友人との間での方言の使用、テレビやラジオでの接触が考えられる。

次に、母国と日本での日本語学習歴を表 3 に示す。

表 3. 学習歴 (母国)

母国			(日本)		
	人数	%		人数	%
①0～3 ヶ月未満	5	16%	①0～3 ヶ月未満	4	13%
②3 ヶ月以上～6 ヶ月未満	17	55%	②3 ヶ月以上～6 ヶ月未満	3	10%
③6 ヶ月以上～1 年未満	0	0%	③6 ヶ月以上～1 年未満	7	22%
④1 年以上～1 年 6 ヶ月未満	3	10%	④1 年以上～1 年 6 ヶ月未満	9	29%
⑤1 年 6 ヶ月以上～2 年未満	1	3%	⑤1 年 6 ヶ月以上～2 年未満	5	16%
⑥2 年以上～5 年未満	3	10%	⑥2 年以上～5 年未満	3	10%
⑦5 年以上～10 年未満	2	6%	⑦5 年以上～10 年未満	0	0%

母国での学習歴は、日本に来る前に、「留学準備」として 3 ヶ月程度、という被験者が多い。⑦5 年以上という被験者は、韓国出身の被験者である。韓国では、第 2 外国語として日本語が設定されている高校が多く、早い人では小学生から日本語を学習する人もいるようである。

日本での学習歴は、表 2 の滞在期間とほぼ連動しており、④1 年以上～1 年 6 ヶ月未満という被験者が多かった。

次に、被験者のアンケート調査時の滞在場所を表 4 に示す。

表 4. 滞在場所

	人数	%
熊本市内	31	100%

滞在場所は、被験者の通う日本語学校と大学が熊本市内に在ることもあり、100%熊本市であった。したがって、被験者が接触している「熊本方言」は熊本市内で用いられている方言である可能性が高い。本調査の被験者に限らず、現在熊本県の外国人は 9107 人で、その内 4062 人は熊本市に集中して在住している（平成 19 年度末現在：法務省統計）。今回の方言テキストは、熊本市内方言のみを扱った方言テキストであるが、在住外国人のための熊本方言テキストとして十分使用価値のあるものであろう。

4-2. 留学目的

表 5 には、被験者の来日、留学目的を示した。

表 5. 留学目的

	人数	%
進学（日本）	24	77%
国へ帰る	4	13%
わからない	3	10%

日本語学校で学ぶ被験者は、大学や専門学校等への進学がほとんどであった。大学で学ぶ被験者には、大学院への進学や、国へ帰って就職するという学生が多かった。

進学希望の留学生は、関東や関西に進学する学生がほとんどで、熊本市内の専門学校や大学・大学院に進学する学生は少ないと思われる。これは被験者が熊本方言を学習する意義や動機を考える点で関連してくる問題であろう。

4-3. 日常使用言語

ここでは、日常使用言語を調査するため、日本人と住んでいるかどうか、自宅で日本語を使用するかどうかを尋ねた。

表 6. 日本人といっしょに住んでいるか

	人数	%
はい	1	3%
いいえ	30	97%

結果は、日本人の友人と住んでいるという被験者が 1 名であった。

表 7. うちで日本語を話すか

	人数	%
はい	0	0%
いいえ	31	100%

先に述べた「日本人と住んでいる」という被験者も、自宅では日本語を使用せず、母語で会話しているようだ。学校やアルバイト先以外での日本語使用率は 0% という結果になった。

4-4. 熊本方言についての知識と使用状況

被験者の 8 割以上はアルバイトをしているため、熊本方言を知っている可能性は十分高い。ここでは、熊本方言についての知識と、現に使っているかどうかを尋ねた。

表 8. 熊本方言を知っているか

	人数	%
知っている	13	42%
知らない	18	58%

熊本方言を知っているという被験者は半数以下の 13 名であった。日本語能力初級レベルの学生にとっては、接した日本語が「共通語」であるのか「熊本方言」であるのかを判断することは難しいと考えられ、おそらく、知らないという被験者の中には、「熊本方言を見聞きしているけれども方言なのかどうか分からない」という者も含まれているであろう。

表 9 は、「知っている」という被験者が提示した「知っている熊本方言」を、形容詞、動詞、接続詞、指示詞、接尾辞、その他で分類して示したものである。

表 9. 知っている方言

形容詞	動詞	接続詞	指示詞	接尾辞	その他
よか (良い)	しらん (知らない)	だけん (だから)	こぎゃん (こんな)	～ばい (～よ.etc)	びゃんびゃん (「車が～行く」等速い様子)
あつか (暑い)	なおす (片付ける)	～けん (～から)	あぎゃん (あんな)	～と? (～の?)	すーすーす (「風が通る様子」等)
さむか (寒い)	おらす (「いる」の敬語)	ばってん (でも)	そぎゃん (そんな)	～たい (～じゃない.etc)	とととと (「(この席) とってるの?」) だご (とても) ほんなこつ

どれも、よく使用される方言、典型的な熊本方言として挙げられるものである。括弧に示したものは共通語訳である。

次に、日本人の「友人」、「近隣住民」、「学校」で接する日本人が被験者との会話で共通語と熊本方言のどちらを使うのかを尋ねた。表 10 に結果を示す。

表 10. 日本人の使用言語

	友人	近隣住民	学校
共通語	90%	23%	97%
熊本方言	10%	77%	0%
両方	0%	0%	3%

日本人の「友人」、そして「学校」では、9割以上の日本人が被験者との会話で「共通語」を使用しているのに対し、「近隣住民」の7割以上が「方言」を使用していることが分かった。例えば「アパートでの挨拶」や「近所の飲食店」などが「近隣住民」と被験者が接触する場面として考えられる。教材作成においては、そのようなコンテキストを盛り込む必要があるだろう。

次に「熊本方言」を使うかどうかを尋ねた。

表 11. 熊本方言を使うか

	人数	%
①よく使う	0	0%
②ときどき使う	3	10%
③あまり使わない	8	26%
④全然使わない	20	64%

「あまり使わない」、「全然使わない」という被験者が9割である。次に「使う」という被験者に対

し、どこで使うのかを尋ねた。

表 12. 熊本方言はどこで使うか (複数回答)

	人数
①学校	2
②アルバイト	2
③地域	2

「学校」、「アルバイト」「地域」で使うという回答を得た。そのような場面で「だれと」使うかを次に尋ねた。

表 13. 熊本方言はだれと使うか (複数回答)

	人数
①学校の先生	1
②日本人の友達	5
③留学生	0
④先輩	0
⑤後輩	0

「日本人の友達」と使うという被験者が多い。筆者の友人で「共通語」を話す友人は、熊本方言を話す友人の輪の中で自分だけが「共通語」を用いると自分だけよそ者のような感じがするので、方言を使うようになったと言っていた。留学生である被験者も同様にそのよそよそしさを感じ、方言を使っている可能性が高い。留学生と日本人の間においても、親しさのマーカーとして「方言」が用いられているのであろう。

4-5. アルバイトについて

「学校」、特に日本語学校に通う学生は日本人と接触する機会も限られ、「熊本方言」に接する機会もほとんどないと思われるが、アルバイト先では「上司」、「同僚」、「客」との間で「熊本方言」に多く接している可能性が考えられる。

まず、被験者に対しアルバイトをしているかどうかを尋ねた。

表 14. アルバイトをしているか

	人数	%
している	25	81%
していない	6	19%

8割以上の被験者がアルバイトをしていることがわかった。また、「していない」という被験者の中

にも「まだしていない」という答えがあり、これからアルバイトを始める被験者も多いと考えられる。つぎに、「している」という被験者に対し、どんなアルバイトをしているのかを尋ねた。

表 15. どんなアルバイトをしているか

	人数
①レストラン	9
②コンビニエンスストア	3
③弁当屋	2
④菓子・饅頭屋	2
⑤パン屋	2
⑥英語・中国語教師	2
⑦ファーストフード店	1
⑧魚屋	1
⑨コミュニティーセンターの清掃	1
⑩不明	2

「レストラン」が9名で最も多く、次に「コンビニエンスストア」と続く。次にアルバイト先で日本人の客と話すかどうかを尋ねた。

表 16. アルバイトで客（日本人）と話すか

	人数	%
はい	14	56%
いいえ	11	44%

半数以上の被験者が客と話すと答えたが、話さないという被験者も多い。「コンビニエンスストア」はレジで客と接することがあっても、代金を伝えたり等、機械的なやりとりで済む。また、比較的客との接触がありそうな「レストラン」であっても、留学生である被験者は「洗い場」や「調理」の仕事に就かされるが多いため、客と話さないという被験者も多いのであろう。

次にアルバイト先で「熊本方言」を使うかどうかを尋ねた。

表 17. アルバイトで方言を使うか

	人数	%
①よく使う	1	4%
②ときどき使う	3	12%
③あまり使わない	5	20%
④全然使わない	11	44%
⑤わからない	5	20%

「全然使わない」という被験者が最も多いが、「よく使う」「ときどき使う」「あまり使わない」という被験者も、合わせて36%となった。次に「使う」という被験者に対し、だれと話すときに使うのかを尋ねた。

表 18. 方言はだれと話すときに使うか（複数回答）

	人数
①客	0
②上司	2
③アルバイト仲間	4
④その他	1

「アルバイト仲間」が最も多く、次に「上司」と続く。具体的には、「アルバイトの女の先輩」「男の同輩」「女の後輩」などであった。

4-6. 母語での方言使用状況

ここでは被験者が母語で方言を使うか、使うという場合はどのくらい使うかなどを尋ねた。

表 19. 母語で方言を使うか

	人数	%
はい	21	68%
いいえ	10	32%

約7割の被験者が「使う」と答えた。具体的には、中国の福建省の福州市地方の方言、山西省の太原地方の方言、桂林地方の方言、大連地方の方言、バングラデシュのダッカ地方の方言、ケミラ地方の方言、韓国の馬山地方の方言、全北地方の方言、釜山地方の方言であった。次に使うという被験者にどのくらい使うかを尋ねた。

表 20. 母語で方言をどのくらい使うか

	人数	%
①よく使う	11	52%
②ときどき使う	5	24%
③あまり使わない	3	14%
④わからない	2	10%

5割以上の被験者が「よく使う」と答えた。「方言」は母語において「地域で使う言語」として被験者の内であって、抜け出ることのできないものであろう。日本語教育の場においても、日本語の中の地域と繋がる「地域言語」として、興味を向けさせることは可能だと考えられる。

表 21. 母語で方言と共通語を使い分けるか

	人数	%
はい	18	86%
いいえ	3	14%

8割以上の被験者が「使い分ける」と答えた。続いて尋ねた「どんなときに使うか」という質問に対しては、「家族と話すとき」、「友達と遊ぶとき」がそれぞれ10名で最も多かった。

一般的に方言は普段の場面、そして共通語はフォーマルな場面というふうに使分けられる。しかし「熊本方言」では、地域に人と密接に付き合うような「職場」において、例えば上司と部下の間でも熊本方言が用いられることがある。したがって「方言」を学ぶことは、単に友人に親密さを示すのに有効であるだけでなく、そのような職場において「よそよそしさ」を取り除くツールとしても有効であると考えられる。しかしながら、いつでもどこでも使っているというわけではなく、やはり「使い分け」が必要だ。方言教材を使って指導する際には、学習者が「使い分け」を知らなかったためにトラブルを起こしたり、誤解されることのないよう適切な「使い分け」を指導する必要がある。

4-7. 熊本方言の学習について

日常生活の中で「熊本方言」に接触する場面はあったとしても、実際に学習したいかということは違う問題である。ここでは「熊本方言」を学習したいかしたくないか、その理由と併せて被験者に尋ねた。

表 22. 熊本方言を学習したいか

	人数	%
はい	11	35%
いいえ	20	65%

「学習したい」と答えた被験者は35%に留まった。しかし、アンケートに答えた31名の被験者の内、14名はまだ来日して1年未満の被験者である。日本の生活に慣れていないだけでなく、日本語の学習を始めて3ヶ月も経っていないという被験者もいる。したがって、「熊本方言どころではない、まず共通語！」という意見があって当然である。一方、2年以上熊本に滞在し、日本人の友人もいる大学生の被験者には「学習したい」という意見が多い。

「学習したい」、「学習したくない」理由を次に挙げる。

表 23. 学習したい理由

- ・熊本方言がおもしろいから
- ・いろいろな（関西方言など）方言に興味があるから
- ・アルバイトをする時使うから

- ・ずっと熊本に住むつもりなので話せると便利
- ・熊本に住んでいるから知っていた方がいい
- ・方言を聞いたり話したりすることを避けられないから
- ・熊本の方はよく方言を使うからわからないと不便

「おもしろい」「興味がある」といった方言に対する知的な好奇心、前向きな学習意欲が感じられる被験者もいる一方、「アルバイト」や「生活」のための「言語ツール」として必要性を感じている被験者が多い。次に「学習したくない」理由を挙げる。

表 24. 学習したくない理由

-
- ・興味がない
 - ・共通語の方が便利だから
 - ・他の県に行ったとき使えないから
 - ・東京に行くつもりだから
 - ・将来熊本を出るから
 - ・日本の勉強に役立たない
 - ・共通語の勉強に熊本方言が影響するから
 - ・せっかく日本に来たのできれいな日本語（共通語）を学びたいから
 - ・まず共通語を勉強したいから
 - ・日本語がまだ上手じゃないから

日本語学校に通う被験者のほとんどは、関西や関東の大学、専門学校への進学を志しており、「熊本方言を学んでも役に立たない」という意見が多かった。しかしながら、進学するまでの期間、アルバイトや地域住民とのコミュニケーションの中で「熊本方言」に接触することも多々あると考えられ、滞在が長くなるにつれて、「学習したい」という被験者と同じように「必要性」を感じるようになるかもしれない。

また「共通語の学習に悪影響」という意見も多いが、「熊本方言」を指導することは、単に日本語中の「地域言語」を学習させるだけではなく、方言学習を通して、日本語学習者に、共通語を外から観察し、再認識する期待を与えられるものと考えられる。

5. まとめ

近年、日本にやってくる日本語学習者の目的は多様化している。熊本県には、中国からの帰国者が多く居住しているし、技術研修生や農業研修生として働いている外国人住民も多い。それに伴い、彼らが暮らす地域の方言を学ぶ必要性あるいは可能性が高まってきている。

今回のアンケート調査では、被験者の100%に「熊本方言を学習したい」という答えは得られなかったが、アルバイトや日本人との接触の中で必要性を感じ、「学習したい」という「熊本方言」に対する

意欲的な学習意識も窺えた。教材の具体的な作成においては、本調査の結果を踏まえ、主に「大学での日本人の友人との会話」、「アルバイト先での上司、同輩、後輩との会話」を『熊本方言を使う場面』として採用し、テキストに盛り込むことができた。